

時代の特色をとらえるヒント

～タイムスリップ中世②と中世の特色をつなぐ実践例～

宇部市立常盤中学校 大迫宣之

1 はじめに

本稿は、「第3章2節 海に開かれた時代」、
「3節 いまにつながる生活・文化」の実践例
である。この第3章2節および3節は、現行
の学習指導要領によれば、大項目（3）中世
の日本に該当し、「ア 武士が台頭し武家政
権が成立したこととその後の武家社会の展開
を鎌倉幕府の成立、南北朝の争乱と室町幕府、
応仁の乱後の社会的な変動を通して理解させ
るとともに、元寇、日明貿易、琉球の国際的
な役割など、その間の東アジア世界との関わり
に気付かせる。」「イ 農業などの諸産業が
発達し、畿内を中心とした都市や農村に自治
的な仕組みが生まれたことを理解させると
ともに、武士や民衆の活力を背景にして生み
出された新たな文化の特色について考えさせ
る。」という記述を受けたものであると考え
られる。

本実践は、こうした理解目標に迫ることを
めざし、「タイムスリップ中世②」という想
像図（以下、想像図）をいかに活用すること
ができるのか、生徒が中世（おもに後半）の
特色にどこまで迫ることができるかを試みた
一提案である。すでに指導書には、想像図の
解説や想像図を用いた授業づくりのアイデア
が提案されているため、別の角度から私見を
述べたい。

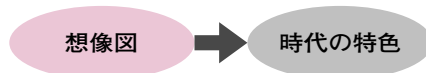
2 授業づくりの構想

周知のように、想像図は作者の解釈により
描かれたものであるし、時代像の一端のみを
表すに過ぎないが、生徒にとってその時代を
思い描かせるためには適したものである。

一方で、歴史的分野の授業づくりにおいて、
個別の社会的事象の理解にとどまらず、時代
の特色といった長いスパンをとらえることの
重要性が強調されている。

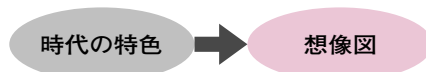
そこで、これらをあわせ考えて想像図を用
いた授業として次の二つのパターンを考えて
みたい。

ア 導入として想像図を用いるパターン



想像図から読み取った情報をもとに、いく
つかの疑問を追究する中で、時代の特色が明
らかになる構成である。

イ まとめとして想像図を用いるパターン



数時間の授業を経て、生徒が獲得した時代
の特色を想像図の中に見出す構成である。

3 想像図から時代の特色へ

(1) 想像図の読み取り



「中学生の歴史 初訂版」p.64～65

はじめのおもな問いは、

何が描かれているか

である。読み取った情報の分類方法はさまざまであろうが、ここでは人とモノとに分類してみたい。

おもに人に関する情報	<ul style="list-style-type: none"> ・商売する人（貨幣で売り買いする人） ・桶を修理する人 ・病気を患っている人 ・馬に乗る人（市場を見回る人） ・猿に芸をさせる人 ・お坊さん ・独楽で遊ぶ子ども ・烏帽子をかぶる人とかぶらない人 ・荷物を運ぶ人 ・長い袖の服を着た人 ・笠をかぶった女性 ・船から上陸する人 ・材木を切っている人
おもにモノに関する情報	<ul style="list-style-type: none"> ・たくさんの船 ・商品（着物、桶、米、刀、陶磁器） ・柵 ・板葺き屋根 ・生活で使う道具（瓶、桶） ・のこぎりなどの道具

生徒は上記のような情報を提示すると考えられる。この時点では、種々の情報が混在しており、生徒の疑問は広がるばかりである。そこで、扱う内容を整理し、焦点化する必要がある。たとえば、「海外との関係に関するもの」「産業の発達に関するもの」「身分の違いに関するもの」とまとめることができる。

（２）読み取った内容の解釈

画面から読み取れる内容を整理し、次に読み取れない部分を追究する。

なぜそのような人・モノが存在するのか

と問うことで、当時の情勢に目を向けることができる。実際の授業では、時代の特色を端的に示す数例を扱うにとどまる。

	追究した内容例
海外との関係に関するもの	<p>《長い袖の服を着た人はだれか》 明や朝鮮からの商人が頻繁に出入りしており、商人たちは、領主の保護の下に貿易を行っていた。この頃の博多商人は日明貿易や日朝貿易だけでなく、琉球を経由して東南アジアとの貿易にも関わった。</p> <p>《貿易の品は何か。またその影響は》 明には金や銅、太刀、扇を輸出し、銅銭や陶磁器、絹が輸入された。朝鮮には銅を輸出し、木綿を輸入した。これにより、陶磁器が生活に浸透し、木綿も国内で栽培された。銅銭は貨幣流通に大きな役割を果たした。また、博多商人は巨万の富を得た。</p>
産業の発達に関するもの	<p>《商品（着物、桶、米、刀、陶磁器）はどこからやってきたのか》 たとえば、木綿栽培は15世紀には始まり、16世紀に入ると産地の名がついた商品が流通した。織物などは工程ごとに分業化が進み、生産力が向上した。これらの商品が各地をめぐる商人の手によって運ばれた。また、職人が町に住み、消費者の嗜好に合わせた商品を作り出すことも多かったようである。</p>
身分の違いに関するもの	<p>《馬に乗る人（市場を見回る人）はだれか》 15世紀の博多の町は、おもに大内勢力と大友勢力の配下となっていた。領主を大内氏と考えれば、馬上の人物は、現地の下代官であった山鹿氏の関係者かもしれない。家人同士の抗争など、日々、主導権争いがみられた。</p>

15世紀から16世紀にかけての動き

日本のおもな動き	博多に関する動き	世界のおもな動き
14c 後 倭寇が中国や朝鮮沿岸をあらず 1392 南北朝が統一される 1401 明・朝鮮と国交を開く（第1回遣明船） 1404 明と勘合貿易をはじめ 1419 応永の外寇 1428 近畿地方で正長の土一揆がおこる 1429 尚氏が琉球を統一する 各地で都市が発達する 1457 蝦夷地でアイヌ民族が蜂起する 1467 応仁の乱（～1477） 1485 山城国一揆（～1493） 1488 加賀国の一方向一揆（～1580） 下剋上がさかに行われる 1523 寧波の乱（大内義興と細川高国が争う） 1536 大内義隆が遣明船を再開する 1543 ポルトガル人が種子島に漂着、鉄砲の伝来 1549 宣教師ザビエルが来日、キリスト教の伝来 1551 大内義隆が家臣陶晴賢の謀反で自害 1555 毛利元就が陶晴賢を破る 1560 桶狭間の戦い（織田信長が今川義元を破る） 1575 長篠の戦い（織田信長が武田勝頼を破る） 1585 秀吉が関白となる	1371 今川貞世が九州探題に任命され、日明貿易開始に関わる 1429 大友氏は朝鮮に使者を遣わして博多支配を宣言 1433 大内家人と少弐家人が博多で衝突 1478 大内政弘が少弐勢力を追放し、博多の町は大内・大友勢力の配下となる 漂着船に乗る王直は博多商人と貿易をしていた 大友宗麟が博多を統治する 1559 筑紫権門により博多の町が焼失 1569 立花鑑載により博多の町が焼失 1580 龍造寺隆信により博多の町が焼失 1586 島津義久の軍が博多を焼きはらう	1368 明が中国を統一 1392 高麗が減じ、朝鮮王朝がおこる アジア全域での交易の活発化 1492 コロンブスが西インド諸島に到達 大規模な人とモノの交流 1517 ルターが宗教改革をおこす 1534 イエズス会がつくられる

タイムスリップ中世②の時代

(3) 時代の特色との関連

想像図があらわす時代がいつ頃なのかを年表に示したのが上の表である。この年表からもわかるとおり、まさに「激動の時代」であった。琉球や蝦夷地では民族形成の動きが見られ、山城や加賀では独自の地域権力が確立された。博多は国際都市としての性格を強め、豊かさを享受した反面、諸勢力からの被害を受けることもあった。

想像図は、中世のどのような面を表しているのか

と問うことで、生徒が追究の過程で獲得した「時代観」を読み取ることができる。授業のまとめとして、「想像図の……は中世の……な面を表しているといえる。中世は、……な時代だったのではないかと生徒が語る場面を設定することで、画面と時代をつなぐことができる。

	時代の特色との関連に注目した意見例
海外との関係に関するもの	想像図に明や朝鮮からの船や上陸する人々の姿が見られるのは、貿易が盛んに行われ、市場を中心にさまざまな商品が流入した中世をよく表している。また、この貿易の利益をめぐって諸勢力が争うことになったことが想像できる。 中世は、アジアを舞台に活躍する商人たちの時代だったといえるのではないかと。
産業の発達に関するもの	想像図にあるように、さまざまな商品が並び、多くの商人や職人がいたことは、市場の賑やかさだけでなく、商品の生産や流通が進んでいた中世の一面をよく示している。 中世は、技術力が大きく進み、さまざまなものがつくられ、現在の日本を形づくる時代といえるのではないかと。
身分の違いに関するもの	想像図にあるように、見回りの代官が来るものの、人々の自治組織による町の運営が一般的であったのではないだろうか。この時代の主人公は、有名な将軍や守護大名ではなく、この想像図に登場するような無名の人々だったと思う。 中世は、一般庶民が、はじめて歴史の表舞台に登場し、政治的な力として権力を動かした時代であったといえるのではないかと。

4 時代の特色から想像図へ

(1) 時代の特色の特定

長いスパンで特色をとらえるためには、他の時代（古代や近世など）との比較は欠かせない。

中世とはどのような時代なのか

と問う場合、古代の逃亡と中世の逃散や土一揆、近世の百姓一揆といった一見似かよった事象を比べると特色をつかみやすい。比較するための尺度として、次のようなものが考えられる。

政権・基本法・中央と地方・領域・外交・経済の基本理念・主たる産業・都市の分布・流通・交通・人権感覚・勤労観・主たる文化

これらをもとに、時代の特色を追究することも可能である。ちなみに、指導書には、中世の特色としていくつかの側面を例示している。

- ・ 倭寇と東アジアの貿易体制
- ・ 琉球とアイヌがになう東アジアの交易
- ・ 全国が分裂した戦国時代
- ・ 生産のくふうとさまざまな専門家の登場
- ・ 自分の身は自分で守る世の中
- ・ 庶民生活の大変化

(2) 社会的事象が生起する必然性

これらの特色のうち、たとえば「自分の身は自分で守る世の中」という側面から

その社会ではどのようなことがおきるのか

と問えば、犯罪や暴力から自衛するために組織や集団を整える必要性を感じる。政情不安

と自力救済をつなぐことを経験や既有知識から導き出すことができる。

(3) 人やモノへの置換

想像図にはどのように描かれているか

と問い、画面に注目させることで生徒のイメージをふくらませる。「自分の身は自分で守る世の中」として、指導書には「人相の悪い男たち」を例にあげているが、表情のみでは生徒も読み取りにくいので、教師からの補足説明が必要であろう。

5 おわりに

以上、想像図の活用方法について二つのパターンを述べた。これらはどちらか一方のみというものではない。両者の発想を授業構成にいかし、具体と抽象を往復する授業づくりが必要であると考えている。

最後に本実践を発展、深化させる方向性についてふれたい。

(1) 社会の一般理論を構築する授業として

歴史を学ぶうえで、時代を何度も往復することが不可欠であり、その中で、時代を超えて見られる共通性、一般性を見出すことができる。たとえば、中世において「政権の不安定性、脆弱性^{ぜいじやく}と人々の意思表示、行動の激化」や「大量消費社会を支える大量生産システム、技術革新の進展」、「自治組織と排他的な意識の表れ」などを見出すことができる。

(2) 中世の人々の価値観に迫る授業として

市場（市庭とも）が周縁の地に開かれていたことは、中世の市場がモノとモノとの贈与互酬の関係を断ち切るという当時の人々の考えに貫かれていたことを表す。昨今の社会史の研究成果から人々の価値観にもふれることができる。